

岡崎市ぬかたブランド協議会

調査団体名	： 岡崎市ぬかたブランド協議会	団体代表者名	： 眞木宏哉(会長・岡崎森林組合代表理事組合長)
設立年	： 2018年1月	対応してくれた人の名前	： 眞木宏哉、荻野昌彦(運営委員長・岡崎森林組合代表理事専務)、小林哲夫(事務局・岡崎市農務課)
活動拠点	： 岡崎市額田地域	調査員	： 沖 章枝、太田 修、浜口美穂
取材日	： 2018年12月27日	レポート作成者	： 浜口美穂

活動内容

額田地域において、所得の向上や雇用の増大に向け、地域の眠れる資源・忘れていた資源を再発見・再活用し、商品化や販売促進等の取り組みを実施している。農山漁村振興交付金(山村活性化対策)(2018～2020年度まで3年間、年間1,000万円上限)を活用した事業。

交付金の申請にあたり、行政主導ではなく、地域の人々が中心となって取り組もうと、2018年1月に協議会が発足。その後、次々に額田地域に根を張る主立った人・団体が加わり、以下の7つの部会における活動が急激に膨らんでいる。2018年12月3日現在で、委員8名、運営委員11名、部会員は延べ66名に広がった。事務局は、岡崎市役所の農務課と林務課。

<部会と2018年の主な活動>

- かき氷部会・・・「おかざきかき氷街道」と題し、ぬかたの天然水「神水(かんずい)」と地元で採れた果実、お茶、野菜などをふんだんに使用したかき氷を、複数の飲食店が時期を統一して提供(スタンプラリー期間は7月21日～10月30日)。「神水」は、ぬかたの銘酒「孝の司(こうのつかさ)」の原水であり、額田地域の誇れる資源の一つ。「おかざきかき氷街道」は11月、愛知県知事から「いいともあいち食の街道」に岡崎市内で初めて認定されている。
- 木材部会・・・木を売るためのシステムをみんなで考え、さしあたって薪を売り込むための足湯をつくることになった。薪は三河地域の森林整備で生じる間伐材を活用したもの。木質バイオマス賦存量調査、間伐材を用いた簡易テント・足湯キット(湯は薪ボイラーで沸かす)の試作、岡崎市農林業祭など様々な市内のイベントにおいて足湯体験を実施するとともに、間伐材薪のPRも行った。
- 葉草部会・・・ヨモギ蒸し風呂や入浴の際使用する国産ヨモギを求める声に応じ、良質なヨモギの栽培・製造・販路開拓・ビジネス化に向け検討。試作した乾燥ヨモギは、足湯体験イベントで使用・試験販売を行った。将来は耕作放棄地対策の一つとして期待される。
- 鮎部会・・・天然鮎を漁獲後、飲食店に提供し、来店者による天然鮎の評価検証、天然鮎の保存試験を行い、東海道中膝栗毛の岡崎宿のうまいものとして登場する鮎の肴の名物復活に向けた検討を行った。
- 自然薯部会・・・額田地区特産の自然薯。近年、生産者が徐々に減り、生産量も減少している現状を打破しようと、商品の開発・リニューアル(漬物「とろろじゃん」として改良、切った自然薯を真空包装にして商品化)に取り組み、のぼり旗を作るなどして発信力を高めている。
- 販売戦略部会・・・2019年2月に東京ビッグサイトで開催される「第1回山の恵みマッチング」に出展。それに合わせ、PRする商品を含めた地域を紹介するリーフレットの作成等を行った。
- 山菜部会・・・統一ブランドマークを商品に貼付する等により、PRを行った。
- その他・・・統一ブランドマークの作成、既存商品のリニューアル・商品の新開発、様々なイベントに出展し、ぬかたブランド品をPR・即売、研修(人材育成)などを実施した。

キャッチフレーズ

ひと、水、緑が輝く里 ぬかた

会のモットー(何を大切にしているか)

- ・とにかく楽しく！(みんなでいつも言い合っている)
- ・対話と実践から眠っている地域の力を再起動していく。

連携している団体・専門家・自治体など

岡崎森林組合、岡崎市ぬかた商工会、岡崎市農業委員会、あいち三河農業協同組合額田営農センター、額田木材製材業組合若手会、岡崎市食品衛生協会額田分会、ぬかた観光地化推進協議会、額田林業クラブ、(一社)奏林舎、じさんじよの会、NPO法人アースワーカーエナジー、ぬかた体験村、岡崎女子大学、愛知学泉大学、他多数

現在直面している課題

始まったばかりで団体としては特に課題はないが、ジビエの活用については、地域の最大の課題であり、最大の資源でもあるので、問題は多いが、期待も大きい。12月に行った1回目の関係者の集まりで課題の抽出および意見交換を行ったが、参加者相互が知らないことも多く、このような集まりの重要性を実感した。山間部の地域はどこでも頭を悩ませていることなので、額田で成功例をつくりたい。

今後やってみたいこと

人が集まるような空間・仕掛けをつくっていきたい。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 短期間でこれだけ広がった理由は？

<答え>

額田地域の人口は2018年12月1日現在で約7,900人(岡崎市全体では約387,800人)。2006年の合併から約1,000人減っている。都市の経済対策が先行しがちな市の施策の中で、取り残された額田地域の危機感が高まっていた。しかし、活性化のために何かをやらなくてはという思いはあったが、お金がなく足踏み状態だった。そこに農山漁村振興交付金の話があり、一気に火がついた。ちなみに、交付金の対象地域は、岡崎市の中でも額田地域だけだった。すでに商工会によるかき氷街道の動きがあったので、どうせやるなら地域で手を組んでやろうということになった。交付金の予算が大きく、使い方に制約が少ないことも手伝って、一つが動き出したら、それに絡んでいろいろな動きが派生していった。いい形で地域みんなが絡んで動いている。

その他、伝えたいこと

個人で頑張っている人やお店はあったが、みんなが話せる場所がなかった。隣にいても何をやっているのか分からない状態だった。この協議会ができて、日々の仕事の中でふと思いついたこと、仲間がいたらやりたいとずっと思っていたことなど、それぞれの部会で活発な意見が交わされているのを見て感心する場面が多い。

役所主導の協議会運営は、「やらされている感」が強く働いて続かないケースが多いと思うが、この協議会は皆とても楽しそうに動いている。交付金の対象事業期間は3年間だが、この間に地域で資源を再発見し、コラボで新しいものが生み出せるかもしれない。若いメンバーも多いので、これからは楽しみ。



額田地域にある岡崎森林組合で取材。会長の眞木さんは、同組合長、運営委員長の荻野さんは、同専務。岡崎森林組合は、「山村再生担い手づくり事例集(2014年3月発行)」及び「その後いかがお過ごしですか？プロジェクト(2017年3月発行)」に掲載されている

かき氷部会



かき氷街道のポスター。額田地域で酒づくりにも使われている超軟水「神水」を使ったかき氷。7～12月で6,271杯を販売した



木材部会



薪ボイラー



足湯体験イベント

薬草部会



ヨモギ苗の定植
今後、耕作放棄地対策として期待できる

鮎部会



真空包装およびマイナス60℃保存による劣化状況の検証を行った

自然薯部会



「とろろじゃん」商品化



その他全体



統一ブランドマーク



イベントに出展
ぬかたブランド品をPR